継続する遊びの計画と実践

関　恵美子

「先生　また　あした　続きするよ」と言う子どもの声が聞かれ出すと私はホッとします　何か子どもが自分の足でしゃんと生活し始めたことを思うからです　遊びというものが、その日　一日で消えたり、また先生に遊んでもらう生活からは、自分というものがなかなか出て来ません。遊びの中へ子どもがすっぽり入り込んで精一杯自分を出し切って楽しんでこそ、はじめて子どもが生活したと言えるとおもうのです。

たた単に遊びたいから遊ぶという衝動的刹那的なものではなくて、これをこうして遊ぼうという考えをもって進めてゆくためには、やはり小さな発見や疑問をみんなの問題として考え、解決に努力し、そこからまた新しい興味が生まれてゆく――という積み重ねがなくてはなりません。

一つのテーマの遊びで起った問題への戦いを、一つ一つその上に積んでゆくためには、当然、継続ということが出て来ます。

子どもの興味をつなぐのに、教師があの手この手を出して続けてゆくのでは、興味がありません　子どもたちが自らの手で意欲をもやして、追求してゆくのには必然的に継続ということが生まれて来ます。つまり、子どもが遊びを継続させてゆくからです。

しかし教科書をもたないこうした継続する遊びには時に甘く見た目に、あたかも自ら楽しんでいるように見えても、実は時間ばかり浪費してマンネリになっていたり、しっかりした成長への目標を見失って果して何が子どもの身についたのかという恐しさがあります。

そこで私は次のことをいつも考えて進めてゆくことにしています。

1、遊びに対する子どもの思いを的確に摑んでいるだろうか

昨日から今日へ続いてゆく遊びの中では、一人ひとりの子どもが、今日の遊びに対する思いを正しく摑んでゆかねばなりません。その思いも遊びの進みによって次々と変わってゆきます。それを正しく摑んで基底にして明日の遊びに進んでゆくのです。

くもの巣作りを身体表現した日のこと

一人ひとりがくもになって巣作りが始まりました。部屋の中央に作る子、カーテンの隅っこにつくる子、カハン置きの棚につくる子みんな一生懸命です。

自分の眼でみたあのくもの巣――或る時はあまり立派で丸い網やねと感心したこと。或る時は風に吹かれて破れて二、三本の糸が垂れている悲しい網、その翌日いがんではいるけれど何とか網らしく見えるまでに作っていたくもの努力、――こんな経験がこの子たちのこの時の心の中に燃えていて、それが動きになっていることを思わせたのです。

この時私は一つのことを考えました。

一人ひとり巣作りをしていては、小さい網しか作れない、みんなで糸になって一つの大きな網を作る方向へもってゆきたいと。

ところが、この投げかけをした後、どうも変なんです。今まで輝いていた瞳がかげを落し、その身体全体がくもであり糸だった迫力が消えて、何となくなり切れていないんです。これはおかしいといろいろ乗り出して、やっとみんなで一つの網をつくった時は形はあっても、もはやくもの網ではなくなっていたのです。子どもの心が活きていなかったのです。さっきの一人ひとりがそのままくもであり糸でありして丹念に作っていたあの巣作りは形として動きとしては、小さくても心は部屋一杯の巣作りだったのです。眼に見えない心の糸が張りめぐらされていたのです。これが子どもの夢であり、思いだったのです。改めて友だちが糸になり、手をつないで部屋一杯形を作らなくても彼らには結構心の大きな網ができていたのです。だから、この小さな一人ひとりの網を使って蜂になったら、きっと本気になってこの網をくぐり抜けたと思うのです。

糸の気持も蜂の気持も自分でしてみて分るという、この幼児の特性がはずされていたのでした。

この子どもの夢――一人ひとりが巣作りをして、それが皆部屋一杯の大きさに拡がり、そのどれもに蜂がかかってゆく――これを大事に暖めてゆけば、やがて　みんなで網を作っても、その心を摑み得るのではないでしょうか。この育ち　と言うか飛躍しないで積んでゆくことは、その場　その時の子どもに集中してゆくことから生まれ、子どもがそれに心を集めることなのだと考えます。

かたつむりで遊んでいた子どもたちが〝これ足あらへんなあ〟とささやいています。〝ほんとうや、足あらへんのに歩くわ〟これは誠にひそやかな会話でしたが子どもたちの一番の思いは、おとなの考えるあの渦巻いた家でもなく、触角でもなく、足がないの

に歩くことだったのです。

こうして、子どもの思いは動きの中にも、ことばの中にも、遊びの中にもさりげなく生まれ消えてゆく場合が多く、殊更に声をはり上げて叫ぶようなことがありません。

このありのままの声を摑むことによって、この思い＋αの夢を盛りつけることが大事なことではないでしょうか。

2、子どもが「今何をするんだ」という目標と考える姿勢があるかどうか

ともすれば〝先生々々〟と言うことは裏返せば精神的な受身を物語っていましょう。

つまり目立つ先生であってはならないということなんです。

保育の中で先生が目立つということは、教師の枠の中だけで子どもが動いているということで、もっと教師のことばに刺戟されて無限の中で自発活動をするということであって欲しいと思うのです。

子どもの動きの中に、求めるもの、考えるものがあってこそ、子どもは本当に自立してゆくのだと思います。この求めるもの、考えるものをどうもたせるか、ということが問題になってきます。

遊びのその時々の目標をどの子にもしっかり何をするんだ、考えるんだという意識をもたせるには、それを単純化してはっきりさせるようにしなければなりません。目標の中にいろいろの要素を漠然と入れると子どもは寄りかかってきます。

こんなことがありました。

蜂のみつをとりにゆく時のこと、

「お花のみつを取りにゆきましょう」

「いろいろのお花のみつを集めましょう」

と言うと、誰かの後にくっついて支配されながら、みつを取りにゆく子が現れました。その動きの中に少しも心が通わない誰かがみつを吸う、自分もそこで吸う、これは形としては遊んでいても、この子の魂の燃焼がないわけです。

それは　とりにゆく　という活動の中に問題がないのです。何も考えなくても動きができるのです。

そこで「誰かが吸った花には　もうみつはなくなったの」という問題を出してみました。これは大へん子どもの問題になったらしく、みつを吸うことに抵抗が生まれました。今まで後にくっついて安定していたのが、急に自分で探さなければなりません。中には一人になってしょぼしょぼととひながら探しています。このしょぼしょぼ動く姿は見たところ誠に不安定でおよそ自立した動きとはほど遠いものですが、その心の戦いは、自立への道につながる大事な時だと思うのです。

幼時にはこうした頼りなげな不安そうなふうに見えても、それ

が、その子の自立のチャンスである場合が多いと思います。

必ずしも、自信に輝かせて張り切って動きまわる姿のみが尊いのではなく、こうした自立への努力をより尊いものとして考えたいのです。

このような構えをもちながら、いくつかの壁に当り、苦しみ、子どもから浮き上っている自分を反省したりしながら、遊びを進めて来た記録をもとに、遊びを育てるということを具体的に考えてみたいと思います。

＜主題　蜂あそび　二年年少児＞

目標・仲間を育てたり、生きるために、おいしいみつをたくさん集める蜂の努力を知らせたい
・身を守るために、くまばちやくもから必死に抵抗し戦う気持を摑ませたい
・自分と仲よしの花や、小さな生き物に対して、蜂のおもいやりを知らせたい

	自由遊び	設定保育
5・27 立	・でんでん虫と蜂あそびから独	・リズム遊び
5・28	男の子の蜂にせめられてままごとの女の子も蜂に転向する ・広いお庭へいってみつを一杯吸ってくる （すみれ、つつじ、ガーベラなど） ・蜂の家作り 穴になっていることへの工夫 ・家族ができかかる お父さんがないねん お母さんがないねん　訴えが出る ・みつをとりにゆく 雨のため廊下の柱を利用	お花を探す みつを吸う　蜂の動き ・蜂の巣をみる 仲間を呼んでみんなで吸う ・話をきく（蜂の生活） ・蜂のとび方を考える 高く、低くとぶ 羽根を動かし音がする ・みつを吸うこと 花を痛めないよう針で吸う ・話をきく （みつを吸うことについて）
5・29	・蜂の家の工夫 小さな入口、いくつもある部屋 ・家族構成がはっきりしない ・みつをとりにゆく	・蜂のおとうさんがとぶ お母さんがとぶ 赤ちゃんが大きくなる （羽根ができる、目玉をみがく、とぶけいこをする） ・お池へとんでゆく 花にかくれて休む 高い木で休む ・本を読む 「みつばちの坊や」
5・31	・五つの蜂の家ができる 各家の人員構成について多少助言する	・本物の蜂をみて話合う （おとうさんだ みんなきっと探している）

6・1	入口の戸を作る それぞれ一人部屋をもつこと それぞれの役割について ・みつを吸う だれも吸わない花を探す ・夜のはちの生活を考える	(逃がしてやろう 花壇へ連れてゆく) ・話をきく 逃がしてもらった蜂について
6・3	・遠くへとんでゆこう 園庭園舎いろいろの場へ遠足する ・みつをたくさん集めよう 花を探す—何回もとりにゆく 大事に貯める	・お池の上で休む蜂 水蓮の葉に止まる蜂 ・話合う 蜂のそれぞれの家にみつを どうして集めたか話させる ・水蓮の葉を浮かしてみる
6・5	・家族構成がいろいろ変わる お父さんがない お母さんがない 申し出によって自分達で組み合わせをする ・みつをとりにゆく 裏庭やつるばらにまで積極的に求めてゆく ・中庭をお池にする 粘土板を水蓮の葉にする	・「みつばち」のリズムバンドをする ・「お池のかめと蜂」の話をする
6・7	・針のつき合いが始まる 一家にみつの入れ物が三つできる	・かめと蜂で遊ぶ かめが泳ぐ—かめの背中に休む—かめと蜂の戦い

6・8	子どもが大勢生まれる 家族そろってみつをとりにゆく ・本物のかめで遊ぶ ・製作 粘土で蜂と巣をつくる	・くまばちの話をきく ・くまばちとみつばちの戦い (背中をさすこと 針が折れないように)
6・10	・みつばち くまばち かめの家 それぞれ単独で遊んだり時として戦ったりする	・みつばちの巣を襲うくまばちについて話合う
6・11	・くまばちとみつばちの戦い (姿をかくして襲う 背中と胸を命中させる)	・みつ蜂が花に集まるのをみる 小さな花 大きな花 みつの吸い方 ・くもの巣を発見する はちとくもの巣を考えてみる
6・13	・亀の子がみつばちの家へ遊びにゆく 1. 喜んで迎えた　はちの家 2. ことわった　はちの家 3. 迎えることでもめたはちの家	・峰をみにゆく 小雨のふる中でも花を探しみつを吸う様子に感心する
6・14	・製作（黒板利用） 共同製作で	・木作りが始まる 巣のつくれる立派な木

6・18	蜂を作る 巣を作る 木を作る どんなふうに作るか相談する ・製作 巣作り 立体への工夫がされる	丸くて穴になって奥深いという巣のイメージを表現することにねらいをおく
6・19	・製作 巣作り（続き）	・くもになる くもの巣作りをする
6・22	・製作 蜂を作る 目玉の色を変える 針を立体にする 身体のもようを考える	・くもの巣をみる 〝まるい網 でんでん虫みたいや〟 ・くもの巣について話合う
6・23	・製作 大きな花 小さな花 を作る ・くもとはちの遊び はちを狙う 巣をはって待つ	・リズムバンドをする 「はち」の曲で ・「ファーブル昆虫記」くもとはちを読む
6・25	・くもとはちの遊び 巣を作るくも くもの巣を破るはち ・製作 くもと巣作り	・くもの巣作り 一人で巣作り みんなで巣作り ・巣にかかった蜂の苦しみについて話合う くもの糸が細くてねばっこい網のようなものであること
6・26	・園庭で遊ぶ くもになる 蜂になる くまばちになる 遊具を使って広い場で遊ぶ	・みつばちに対する （くも　くまばち） この動きを考えさせる ・これらを簡単な話にして動きを楽しませる
6・27	・絵をかく（ホスターカラー） 蜂あそびを通して、 蜂の巣、くもと蜂 蜂の戦い、みつを吸う	

1、遊びの出発について

いわゆるきっかけを見つけるということは、大へん大事なことだと思います。

そこで自由遊びの中からそれを見つけ出したり、お話や絵本を読んだ時の反応から、それを摑んだり、また最も確実なのは実物の興味から始まったものでしょう。

例えば小動物を捉え、いじくったり、飼ったりして世話をしている中にしっかり興味が根をおろし、そこから遊びが生まれてくるという場合ですが蜂あそびは、実物を見たことが自由遊びでそれが小さな形で生まれていたのを捉え、始まったものです。

そこで、一つのきっかけが見つかっても果して継続して遊びが行なわれるほど興味深く価値ある展開ができるものかどうかよく考えてみることにします。私はこの時が大へん苦しいとおもうのです。この見通しを誤まれば子どもが遊びを通して育つことがなくなるわけですから。子どもの実態、素材の価値、遊びの見通しといろいろの面から追求してゆきます。

2、遊びを一人ひとりの問題にしっかり結びつけてゆく

いよいよ遊びが始まりますと、自由遊びで、しっかり子ども一人ひとりのものにしてゆくわけです。教師は、この自由遊びの中で起るいろいろな問題を必すみんなの共通問題として持ち出します。そして　みんなで話し合ったり、動きで考えたりして、自分の思いが友達によって高められたり、友達の思いと自分の思いをすることによって新たな興味をもったりして蜂への思いが深まってゆきます。

3、遊びをもり上けてゆくための表現活動

こうして遊ひが子どもの手によって発展してゆくという軌道に乗り出すと、更に深くしてゆくのに表現活動があります。製作をしながら蜂への思いを確めてみたり、身体表現することによって、もっと深く考えてみたり、或る時は、昆虫記を読んでもらって話し合ったりして子どもは再び遊びでそれを確めてゆきます。

蜂の巣の製作の時も、入口が巣と同じ色でした。すると夕方になって、暗くなるとかわいそうだから、よく分るように違う色にしようとか、平面のものでは雨が降ったらぬれてしまうから屋根のあるものでないといけないと言って立体を考えついたり、くまばちが来るといけないから、入口に戸をつけたり、こうして遊びと製作が結びついてゆきます。

また、みつ蜂とくま蜂の刺し合いも、はじめはなかなか迫力がなくて困っていました。

そこで実際に蜂の針をみたり、花のみつを吸う様子やさされた時の痛さを話し合ったりして再び遊びの中で確められて次第に身を守るための生死を争う刺し合いという感じが生まれて来ました。こうしていろいろの表現活動を通して徐々にその心を摑ませ育てて遊びを本物にしてゆくという過程を通ります。つまりラセン階段を登ってゆくように、一つの事柄を次第次第に狙いを高めてゆくわけです。

4、みんなの思いをまとめてみる

一つの遊びを進めてゆくのに、実物をみたり、本を読んだり、製作をしたり、スライドをみたりして話し合い、身体で確め合って綜合的に指導してゆくわけですが、こうして、一ヶ月も経ちますと終結するのに一つのまとめをしておきたいと思います。

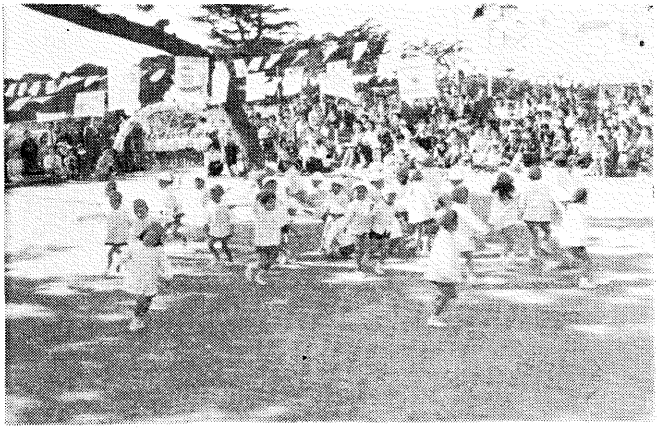
蜂あそびの場合は、ちょうど七月の水遊びになりましたので、十月の運動会にこれをまとめてみることにしました。リズム遊びとして広い園庭を舞台に・はちと花・くもとはち・くまばちとの戦い、以上三場からなる蜂あそびを精一杯させてみました。その時の様子を簡単に記してみます。

おはなし

今日はよいお天気です
はちはお花を探しに来ました。
小さなお花が咲いています
おいしいみつを吸いました
大事にもって帰りました。
森の中に大きなお花が咲いていました。
お父さんはピカピカ光った針をもって出掛けました。
あっいい匂いがしてくる
大きなお花をみつけ、たくさんみつをもらいました。
その時雨がふって来ました。大きな花の中で雨宿りをしました。
やっと雨が止み急いで帰りました。
・はちがたくさん飛んでいるのをみて大きなくもが出て来ました。

子どもの動き

・五、六人ずつのグループに分れて方々から並んでとんで来ます
・女の子だけが坐って花になり男の子はそのみつを吸う
・口をふくらませたり手ですくったりしてとんで帰る
女の子がみんなで一つの花を作る
男の子は針をみがいたりして方々より並んでとんでくる
・匂う動き
・花の中へすっぽり入って吸う
花は次第にしおれて倒れる
花は蜂を真ん中にして身体でかくしてあげる
・両手両足をぴんと張って這って出てくる

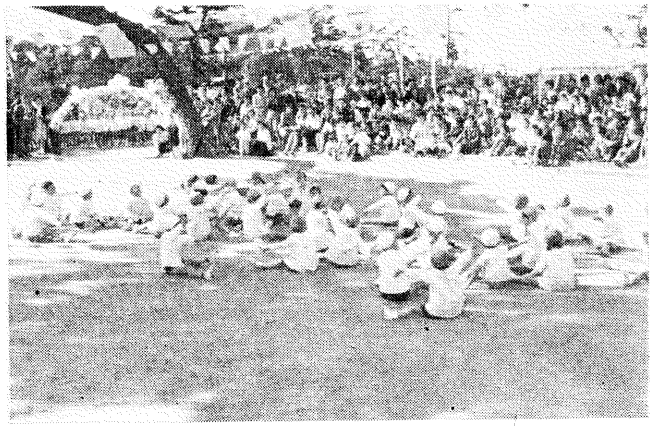


お花のみつを吸った蜂は
とびたちました

・糸を作り始めました。
これでいいと葉っぱのかげにかくれました。
・そこへ蜂の子が遊びに来てくもの巣をみつけました。
・みんなでくもの巣を破ることにしました。
・それをみていたくもは怒ってもっと丈夫な巣網を張りました。
・そこへ安心した蜂がとんで来てビシャとひっかかりました。
何とかはずそうともがきました。
・それを見てくもがとび出して来てぐるぐる糸をまきつけました。
・糸をしめらればったり倒れました。
・蜂は苦しくなって泣きました。そこへかぶと虫さんが助けに来ました。
・くまばちの家とみつばちの家がありました。
・お腹のすいたくまばちとみつばちは時々けんかをしまでくもの巣を突き破る
安心して帰ってゆく
・くもは円形に丸くギャロップする
そして自分で細かく作ってゆく
・ひっかかる蜂の動き
かげで糸を引くくもの動き
このタイミングが大事
蜂は精一杯あばれる
・もがく蜂とそのまわりを糸でまくくもの動き
・糸を引く蜂が倒れるこの呼吸が合うように
・かぶと虫の動き
切ってくれる様子、大事な羽根が傷ついてふらふらしながら帰ってゆく
・子ども二つに分れて家を作る
・一匹ずつていさつがとんでくる
相手の家をよくみて帰る

どこにしようか探す
両手を糸にして園庭を直線にギャロップで作る
・急いで仲間を呼びに帰る
・全員針を光らせてよういすすめ！

大きなくもはどこに糸をはろうかと
探しました



巣を破られて怒ったくもは再び出て来ました。

した。

戦争だ。

その時一番強いのがとび出しました。

・みんな刺し合いました。

戦いが終りました。

あしたも元気で働こうと思って帰ってゆきました。

みんな針を出して近よります。

お互い強い子を選んで一騎打する。

・勝負を待ってわっと刺し合いが始まる、この時赤帽と白帽に分けておくと勝負がはっきりします。刺されたものは倒れています。

・倒れていた子もみんなパッと立って元気よく行進して退場。

以上もっと動きの説明とか場のとり方全体の流れを記さないと分りにくいと思いますが、子ども達が本当に蜂になって楽しんでくれたことはうれしいことでした。

子どもがもった一つの興味が、友達や教師によって支えられて、次第に深い興味として自分で追求してゆきたくなるのには、時間と遊びの場が必要です。

ふり返ってみて、こんな長い期間を経て果して本当に価値があったろうかと思い迷うことがあります。いくら長い時間をかけても、

くもの糸にまかれてばったり倒れた蜂

内容がしっかりしていなかったら意味がありません。

私は、こうして継続して遊ぶ場合には、その内容をもっと科学化して無駄のないよう検討してゆかなければならないと考えております。

（芦屋市立精道幼稚園）

電車にのってどっか行ったとき
坐ってる人だけでだれも立ってなかった。
ぼくの隣の隣に
　ちいちゃい赤んぼの女の子と
　まだ歩けない小さい男の子が座って
　　二人であそんでたら
みんなその子たちばかりみてたよ
みんなの目が　そっちの方むいてたもの。
ぼくも見てもらいたかったな

清　水　エ　ミ　子

――せむしガードより――